

Newsletter from KUIS Research Institutes

創刊号
2023.3.15



神田外語大学 言語教育研究所 / 日本研究所 / グローバル・コミュニケーション研究所

神田外語大学言語教育研究所、日本研究所、グローバル・コミュニケーション研究所が合同でニューズレターを発行することとなりました。ニューズレターを通して3つの研究所の活動など、「研究」の視点から神田外語大学の情報を発信できることを願っております。

記念すべき創刊号は、今年度をもって研究所所長を退任される日本研究所所長の窪田高明先生とグローバル・コミュニケーション研究所所長の高杉忠明先生のスペシャル対談特集となります。ファシリテーターは言語教育研究所所長の伊藤泰子先生が務めました。



窪田先生



高杉先生

対談

窪田 高明 先生

(日本研究所 所長、
本学 名誉教授・学術顧問)

高杉 忠明 先生

(グローバル・コミュニケーション研究所 所長、
本学 名誉教授)

ファシリテーター

伊藤 泰子 先生

(言語教育研究所 所長)



-- 専門分野について教えてください。

窪田：倫理学、その中でも日本倫理思想史です。中世の宗教と道徳が専門です。

高杉：国際関係論です。アメリカの東アジア政策、日米関係論を専門にしています。

-- 本学の1年生や高校生に専門分野についてわかりやすく説明すると？

窪田：人間が生きることをどう考えてきたかってことですね。

高杉：米国が抱える社会問題、政治・外交問題の現状分析と歴史研究です。

-- どのようないきさつでその分野に興味を持つようになったのでしょうか？

窪田：僕は、多くの先生方のように大学院へ行って論文を書いて研究者になったという道は歩いていないんですね。最初は美学を勉強していたんですが諸般の事情で美学科にいられなくなって、ぶらぶらしてたら友達がゼミに誘ってくれて、そこが日本倫理思想史の先生のゼミだったんです。そこで大学院に行けばよかったんですが、その頃大学院に行く希望者は多く、つまりライバルが多くて、研究者になりたいという気持ちもあまり強くなかったので無職になってしまいました。でも論文は書いていて、先

輩のススメで学会誌に論文が載って、そのあと地方の小さな短大に就職して、研究職についたわけです。

高杉：私も窪田先生と似た経緯を辿りました。小中高と野球少年だったので、本を読むのを生業にする学者の道は全く関心なしでした。大学でも野球をやろうとしたのですが、野球部員は甲子園経験者ばかり。ここでは勝負できないと思い、まだマイナースポーツだったアメフト部に身を投じました。2年次にレギュラーの座を得たものの大怪我をして退部。その後、国際法のゼミに紛れこみ政治と法について議論する内に勉強が面白くなりました。当時の体育会アメフト部には精神主義がはびこっていて、夏合宿では死ぬのではないかと思うほど苦しい練習を何度も経験、そこから人間は窮地にたった時どうやって生き伸びようとするのかに関心を持ち、やがて政治学の研究に入っていました。

-- ご自分の研究において心のよりどころとなるような研究者はいますか。

窪田：僕は、尊敬してる人はいるんですがその人みたいになりたいと憧れるような人っていないのは、あんまりいいですね。たとえば、



伊藤先生

江戸時代の学者で荻生徂徠という人がいて、それはもう頭がとてつもなくいいんですけど、憧れるというわけではありません。

高杉：私が一番影響を受けたのは英国の思想家ホッブズです。彼は「万人の万人に対する闘争」という有名な言葉を残しています。

窪田：ホッブズって文章が面白いですよ。文章の展開が魅力的なんですよ。

高杉：ホッブズの考えは簡単に言うと、人間は本来自己中心的で、戦争や災害や飢饉等が起きると、生き残りのため「万人の万人に対する闘争」を始めるが、結局戦いの中で自分の安全さえも脅かされてしまう。それを克服するには互いが社会契約を結び、自分の権利を国家に委譲し、統治者に服従することで安定と秩序を得ることができるという思想です。

-- 話をガラッと変えまして、先生方が神田外語大学にいらしたのはいつ頃でしょうか？またどんな授業を担当されましたか？

窪田：古田先生という、この大学の設立準備のトップに立った方が、「日本倫理思想史」という授業を設置したいということで僕が来ました。ですから、大学ができたときからいます。「日本倫理思想史」と「倫理学」を担当していて、開学当初、「日本倫理思想史」は全学必修だったんです！1学年250人ぐらいで大変でした。

高杉：私も1987年の開学時からです。設立準備委員の小池先生とお会いした時、突然「高杉さんは英語で英語の授業をできますか」と驚きの質問！留学経験はあったものの「私の専門は政治学ですが、」と伝えましたが、後日文部省に英語担当者として届けましたとの連絡。ということで最初の担当科目「英語総合講座」は毎回手に汗を握る思いで授業をしてました。3年目に米国政治経済論を担当できてホッとしました。その後、日米関係論、米国外交論などを担当しました。

-- では、ここから研究所の話になりますが、研究所にまつわるエピソードはございますか？

窪田：正直言うと苦労した記憶しかありません。最初に異文化コミュニケーション研究所ができて、次に言語教育研究所、そして3番目に日本研究所ができたんですけど、所長と他の研究所員があまりうまく行かなくて。土田先生と町田先生（現在の日本研究所副所長）の時代になってようやく組織らしくなったかな。それから、亀井先生やムスタツェア先生といった外国人の先生が日本研に入られたことで、扱うテーマが広がって、さらに学生との接点が増えましたね。

高杉：神田外語大は1990年代までは語学大学というイメージが強かったのですが、2000年のカリキュラム改定で、言語、文化、コミュニケーション、地域国際研究の4コースが導入され、学生は「語学+α」という、自分の専攻語学を手段にして、言語研究やアメリカ研究などを目的に勉強できるようになりました。地域国際研究コース所属の教員も「国際社会が見えてくる」というオムニバス授業を通じて自分の専門を学

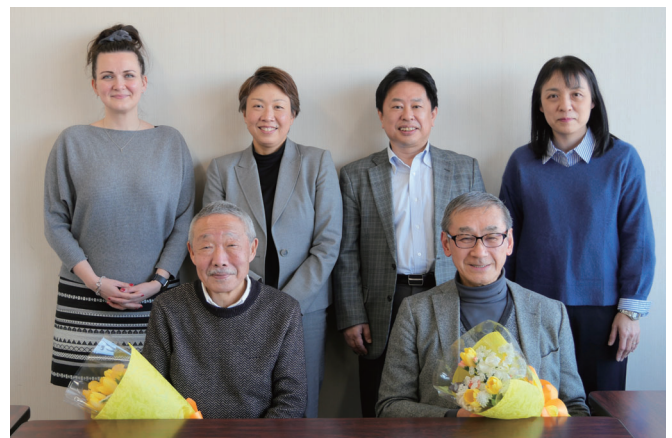
科の壁をこえてレクチャできるようになり、その時のレクチャを『グローカリゼーション』という本にして出版したことは懐かしい思い出です。この本の出版で地域国際研究コースの教員の間一体感が生まれ、それを佐野隆治理事長（当時）が受け止めて下さり2008年の国際問題研究所開設につながったのだと思います。

2008年は米大統領選挙の年でした。この年6月、共和党副大統領の有力候補M・ハッカビー氏の講演会を研究所主催で行う事になりました。研究所開設後わずか2か月、場所もスタッフも決まっていなかった中でビックイベント開催でしたが、教員や事務局の全学的な協力を得て無事に乗り切りました。4-101教室（400人教室）に入りきらないほど人が集まり、懇親会ではハッカビー氏が学生とギター演奏のコラボをして大変盛り上がりました。また2011年のルース駐日米国大使の講演も懐かしい思い出です。

-- では最後に、神田外語大学の研究事情について一言お願いします。

窪田：うちの大学だけでなく、日本の大学の研究機能が弱くなってきているのは問題ですね。先生方の業務の負担が増えて研究のための余力が減ってしまう。日本の大学の先生になりたいって思う人はどんどん減ってしまうだろうなと思いますね。

高杉：窪田先生と全く同意見です。本学の教員は教育熱心でいつも大変忙しいです。ただ、その中で活路を見出したのは、2012年から異文化コミュニケーション研究所と国際問題研究所が統合され、グローバル・コミュニケーション研究所ができた事です。そこに関係する先生方を中心に教育と研究を両立させようという強い気持ちがいいつもありました。また語学を専門とする教員だけでなく、地域研究や社会・人文科学の研究者も多いですよ。これは他大学にない神田外語大の強みです。それを活かしつつ研究所を核にして学際的な研究に取り組んでいくと面白い成果を生み出せるのではないかと思います。研究所の発展をお祈りしております。



3 研究所の先生方（後列：左からムスタツェア先生（日本研 所員）、伊藤先生（言語研 所長）、町田先生（日本研 副所長）、河越先生（グローバル・コミュニケーション研 副所長）